

## ケンブリッジ大学図書館

熊谷 ユリヤ（経済学部教授）

ロンドンから電車で50分の田園地帯に、中世の面影が残る学園都市ケンブリッジがありますが、そこに「ケンブリッジ大学」というひとつの学校がある訳ではないのです。学生数約17500人（約半数は大学院生でその半数は留学生）、教職員数約3000人、そして多数の研究者を擁する「ケンブリッジ大学」は、数多くの独立教育機関の総称です。1209年に起源をさかのぼるカレッジを含めて、新旧31のカレッジ、9つの学部、多数の研究所が市中各所にあり、特に、中心部は、街がそのままキャンパスのようです。各カレッジは、様々な学部や研究所に所属するメンバーがいて、学際的な教育・研究機関で、財政・学術・教育・研究面でも自立した組織なのです。

大学関係の図書館もこの枠組みを反映していて、まず巨大な大学図書館とその分館が4箇所あります。その他に、リストをざっと数えただけでも「カレッジ図書館」が30箇所、「学部・学科図書館」が58箇所、そして、研究所等の図書館が23箇所という構成になっています。利用の手引きによれば「世界で最も偉大な学術研究図書館のひとつ」で、自校の学生や教員のための図書館というより、「当館の使命は、世界一流の出版物と情報サービスを、地元・国内・世界の学術コミュニティに提供すること」となっています。

ケンブリッジ大学図書館は、大英図書館などと並んで、英国とアイルランドで出版される全ての書籍・学術および一般雑誌・地図・楽譜を無料で受け取る権利を保障されています。大学図書館とその分館だけで、希少本・古文書・古図版などの「宝物」と呼ばれるものを含めて、所蔵の点数は700万部以上です。大学関係116箇所の図書館の全蔵書数を探ったところ、「公式の数はないけれど膨大な数であることは確か」だそうです。



メインの大学図書館は、貴重な蔵書や資料を守るため、建物の造りが頑強で規則やセキュリティが厳しく、入館にはIDカードが必要で、外部者は公式な依頼文書を提出して資格が与えられなければ使用することができません。サウスコート、ノースコート、サウスウイング、ノースウイング各棟がそれぞれ6階建になっていて、廊下にも書架が溢れ、書庫になっている高い塔も飽和状態だそうです。開架の図書も多くの部屋に分かれていて、はじめのうちは、オンライン検索した本を探しにいくだけで迷子になりそうでした。

貸し出し可能な点数と期間は「フェロー」と呼ばれる教員や研究者やカレッジの正式メンバーと、大学院生が、10冊2ヶ月間、私を含めた客員の研究者は、5冊2ヶ月間。学部の一、二年生は、閲覧のみで貸し出しは禁止です。あるとき、図書館のコンピューター室で隣に座った学生が猛スピードで本の内容を入力しているので訳を尋ねたところ、「貸りれないしコピー代は高いし、講義の準備や課題に追われてじっくり読んでいる暇がないので、要点をキーボードに打ち込みながら内容を覚えてしまう」とのことでした。貸し出しについては「貴重な本を借り出すのは重大な責任が伴うので、成人と見なされる21歳以下が大半な学年には禁じているのだと思います。でも試練を与えるという意味もあるのかも」という答えが返ってきました。閲覧室でも、熱心というよりは必死に勉強する学生たちの姿が見られます。

館内には展示センターがあって「宝物」の一端を垣間見ることが出来ます。現在の展示は、「視覚の言語：文書と図画にみるダンテ」で、7世紀にわたるダンテ関係の貴重な資料は圧巻です。また、講堂では講演なども開催され、展示センターも含めて一般に公開されています。ちなみに、「大学関係者は16歳以上のゲストを2人まで招待できる。ゲストは常にメンバーとともに行動し、建物を見学し、ティールームは使用できるが蔵書に触れることはできない」という規則があります。私の所属するカレッジや学部からそれぞれ僅か徒歩3分程度ということで、朝はティールームのスコーンと珈琲で目を覚まし閲覧室に移動して貴重な資料を利用し、学部での講義聴講やカレッジでの研究会の合間に閲覧室やコンピューター室に戻り、午後には再び3箇所を行き来して、合間にお茶とケーキ類を楽しむことができ…というように、立地面でも非常に恵まれています。